

神戸市営地下鉄海岸線沿線フリーペーパー

TAKE FREE

# THE KAIGAN LINE

6つの駅から巡る、6人のクリエイターのストーリー

The stories of six creators from six different stations





兵庫運河の夜景

たゆたう川の水面のように。

ゆるやかに進む船のように。

海岸線の各地でつながっていく、街と人々。

「シタマチコウベ」に登場した人を中心に

6人のクリエイターを訪ねて、6つの駅を巡る旅。

兵庫運河に身をまかせて、

神戸の新しい景色を探しにいこう。



シタマチコウベ  
ウェブサイトはこちらから

03 ダンサー | 中間アヤカ「舞台に立つこと、この街にいること」

04 抽象画家 | CBA「海外のマーケットにも、近所のおばちゃんにも」

05 家具職人 | 幸玉次郎「手仕事に根づく、職人としての意識」

06 切り絵作家 | トダユカ「今日も、明日も、ごきげんに暮らせるように」

07 靴職人 | 内尾暢志「オーダーメイドで、日常に寄り添う靴を」

08 漁師 | 糸谷謙一「都会の漁師が背負う使命」

09-10 地下鉄海岸線沿線マップ

# SHIN-NAGATA sta.

新長田駅に降り立ち、若松公園にたたずむ鉄人 28 号の巨像を横目に歩く。賑やかなこの通りは大正時代にできたから、その名も大正筋商店街。通りに面した劇場「ArtTheater dB KOBE」にいるダンサーの中間アヤカさんを訪ねた。

舞台に立つこと、この街に居ること

## ダンサー 中間アヤカ Ayaka Nakama

### PROFILE

ダンサー。大分県別府市出身、新長田在住。17歳で単身渡英、ランベール・スクールにてバレエとコンテンポラリーダンスを学ぶ。2012年、文化庁・NPO法人DANCE BOX主催「国内ダンス留学@神戸」1期ダンサーコースに奨学生として参加、ダンサー奨励賞受賞。誰かに、なにかに「振り付けられる身体」にこだわりを持ち、国内外の様々な舞台作品に出演する。2018年度よりArtTheater dB KOBE アソシエイト・アーティスト。

「3歳からバレエを習っていて、高校1年生のときにロンドンのバレエ学校へ留学しました。でもプロを目指すには実力が足りず、バレエを辞めて地元に戻ることに。地元で1年ほど働きましたが、ダンスへの思いを捨てきれずにいました」

そんなときに出会ったのが、この劇場を運営するNPO法人DANCE BOXだった。コンテンポラリーダンスの企画を主に行っていて、中間さんは文化庁の委託事業として『国内ダンス留学@神戸』というレジデンスプログラムの第1期生を募集していることを知る。

「私が19歳だった時のことです。海外の学校ではバレエの成績はクラスで“ドベ”でしたが、並行して学んだコンテンポラリーは一番に近かったから、もしかしたらと思って。最後のチャンスだと心に決めて申し込んで、新長田に移住しました」

バレエを潔く捨ててこの街に飛び込んだことで、人生がガラリと変わることになる。舞踏や歴史などダンスにまつわる学びも得て、卒業後も新長田に留まることを決めた。2018年度からはDANCE BOXのアソシエイト・アーティストとして協働しながら活動を続けている。

「9年も住むとは思いませんでした。神戸というだけでおしゃれな街と思っていたけど、違いました(笑)。地元の別府に似ている、気取らず人を受け入れる雰囲気が好きです。ずっとダンスで生きていくのかは分からないけど、舞台に立つことだけは止めたくない。いまでも、バレエダンサーとして生きていたかもしれない自分に憧れます。私の身体と精神をつくったのはバレエだから。だからこそ、バレエを超える自分だけの踊りを見つけたい。演出家や振付との対話を続けていけば、それが見えてくると信じています」

2019年に発表したソロ作品「フリーウェイ・ダンス」では、一般の人が「初めて踊ったときの記憶」を取材して振付を組み立てていくという、ダンスの新たな可能性を切り開くパフォーマンスを披露した。「形を変えてこの世界に存在する、すべての振付をダンスにしてみたい」という中間さんの言葉を思い出した帰り道。公園でヒラヒラと踊るように駆けまわる子どもたちを眺めながら、次の街へと向かった。



# KOMAGABAYASHI sta.

漁村集落の名残があちこちにある駒ケ林。シタマチ風情にさそわれて、入り組んだ細い路地を探検したくなる。2020年春、長田区の家側エリアに引越してきたという抽象画家・CBAさんのアトリエにやってきた。



海外のマーケットにも、近所のおばちゃんにも



## PROFILE

1965年大阪府出身。Tokyo Design Academy卒業。東京で書籍装幀、雑誌、広告等のグラフィックデザイナーを20年以上経験後コラージュ、ペインティング、ドローイング、映像制作を主とした画家としての活動を始める。最近の展示は、グループ展「絵画と音楽」at KOMAGOME 1-14cas 2018年7月(山塚EYE、五木田智央、中原昌也、角田純)、Solo Exhibition「裸のコンポジション」at Cafe 104.5、(2019年4月~6月)、ドイツ・デュセルドルフ、アートレジデンシー参加(2019年6月)など。セッションペーシストとしても過去多くの経験をもち、映画「東京ゾンビ」浅野忠信主演」ではセントラル録音に参加。

抽象画家  
シーバ

# CBA



「元々、神奈川県相模原市に住んでいました。画業だけで生活したくてアトリエとなる拠点を探していましたが、近場で見つけられず、そんなとき、実家のある神戸市に「アーティスト・クリエイター等の活動支援事業」という行政の制度があることを知ったのが、移住のきっかけです」

補助金を活用して、神社の屋台を納めていたという古い建物の1階を作業スペースとして改装、2階は倉庫として使用している。アトリエ完成を記念して、近所の方向けに見学会兼展示会を開催したそう。

「来てくれたおばちゃんたちがおもしろかったんですよ。作品とか僕の話じゃなくて、自分の家とか地域の話だけして帰っていった(笑)。でも、駒ケ林の雰囲気があったから、開催してよかったですね」

創作活動に制約は「ない」と語るCBAさん。ギャラリーには所属せず、Instagramを作品発表の場として使うことで、海外から購入や展示の依頼が日々届く。今年初めに行った、高級機械式時計メーカー「フランク・ミュラー」スペイン・マドリッド店での展示も、SNSを通じてマーケットから連絡をもらったという。

「抽象画は言葉や文化の壁を突き抜けて、観る人の心にダイレクトに伝わるアートです。Instagramと相性がいいのも、表現したいものをイメージ・色・形だけで届けられるからでしょう。『観た人の気持ちを上げて、ハッピーになつてほしい』という想いが、音楽のように伝わっているのかもしれない。ジャズやブルースが基本の『2小節のなかに音調・音色を取り入れていくように、僕は画面の構成ありきで線・テクスチャー(質感)を選んでいきます。観賞する人にアートの知識はなくてもいいんです。見学に来た近所のおばちゃんも『元気でるわ!』とシンプルな感想をくれました(笑)」

小難しく考えることをやめたからか、壁一面に飾られた線と色彩を純粋に楽しむことができた。アトリエを出て眺めた街の景色も、どこか生きいきとして見える。自転車に乗ったおばちゃんやすれちがって、ハッピーな気持ちになった。

CBAさんの絵に描かれた鮮やかなピンクと、同じ色のセーターを着ていたから。



KARUMO sta.

苧藻駅から徒歩1分、新湊川と高松線が交差する大通り沿いを歩く。かつて大規模な貯木場があったこの地域は、木工を始めとするものづくりの工場が集まるエリアだ。職人が集う苧藻でアトリエを構え、地場産業である神戸洋家具づくりを行う幸玉次郎さんのお話を伺った。

手仕事に根づく、職人としての意識

家具職人  
幸玉次郎

JIRO  
KOUUDAMA

「家具の仕事を始めるまでは、5年間ほどサラリーマンでした。手仕事に憧れがあって、インテリアにも興味があって。当時、神戸の地場産業の後継者を育成する『ものづくり職人大学』がちょうどできたタイミングだったので、思いきって入学しました。ベテランの職員から技術や知識を教わりながら、ひと通り実践しながら学べたことは貴重な経験です」

洋家具の発祥地といわれる神戸で受け継いだノウハウを活かし、機械には出せない手仕事の繊細なデザインを心がけている幸玉さん。失われつつある伝統技術の可能性を、家具をとおして提示していきたいという。

「屋号の『MOU(ムー)』はフランス語で“やわらかい”という意味です。空間にやわらかく溶けこむような家具をつくりたいと思って名付けました。家具は基本的にオーダーメイドなので、お客さんの人柄や家の雰囲気や大事にしています。無垢材にもこだわっていて、木を見分ける目は神戸の職人から受け継いだもの。一見同じに見える木でも種類や使い方を改めて適材適所で使ってあげると、全然違う表情を見せてくれるんです」

幸玉さんは家具だけではなく、残材を使ってクリップやハンガーなどのアイテムを製作し、木の持つ価値を最大限に生みだしている。また、靴に入れるシューキーパーをつくるなど、靴産業が盛んな長田区で一役を買っているそう。職種異なる仲間との協働についてはどのように考えているのだろうか。「苧藻の職人たちは、チームのような関係です。一人ですべてこなすこともできるかもしれないけど、個々の能力を発揮して分業で1つのものをつくっていく。お互いを尊敬しているからこそ、持ち寄った意見を交わしながらものづくりを続けています。移住するクリエイターも増えてきましたが、まだまだ空き家や空き工場はたくさんあります。僕も工場にこもらず、アトリエをオープンにして新しい仲間をエリアに受け入れていきたいですね」

工場に並んだ木材をこすると、ふくよかな香りが立ち上がってきた。アトリエを後にして、川沿いの道を足どり軽く進む。苧藻通のそこかしこに息づく、トラッドな空気にふれながら。

PROFILE

MOU Trateknik & Design代表。神戸ものづくり職人大学で神戸洋家具の技術を学び、26歳で独立。長田区苧藻通に工場を構え、神戸洋家具の伝統ある技術やノウハウを活かし、オーダー家具を主とした木工品のデザイン・製造を行う。

切り絵作家 トダユカ

## TODAYUKA

御崎公園の広々とした空が気持ちいい。木陰で本を読む人、フットサルで汗を流す人。思いおもいに過ごす人たちを羨ましく感じながら、目的地へと向かう。準備中だというアトリエを訪れると、切り絵作家のトダユカさんが迎え入れてくれた。

今日も、明日も、  
ごきげんに暮らせるように



「以前は和田岬駅前のマンションで暮らしていて、二人目の出産を機に主人の実家が近い御崎公園のほうに引っ越してきました。芝生のある公園も近いから、子育てしてる身としては助かりますね。街のおだやかな空気を吸いながら、マイペースに活動しています」

子育てをしながら感じたことを絵にすることが多いというトダユカさん。数年前、加古郡の稲美町にあるパン屋で個展をする際に『ごきげんに』という手づくり絵本を制作した。

「主人の言葉と切り絵を合わせて、1冊の絵本をつくりました。これがけっこう好評で、あれから数年経ちましたが、また新しく本をつくってみたい。今度は1冊だけではなく、たくさんの方に届けられるような形にしたいです」

切り絵はオーダーでの制作がメインで、そのなかでも動物モチーフでつくるウェルカムボードはよく注文があり、これまでに100点以上制作したそう。出産や還暦といったお祝い事でも、見る人の心をくすぐる絵柄は重宝される。

「大切な人生の節目で依頼してもらえるのは、ありがたいことですね。制作はたいへんですが、同じ図案でもカッターで切るたびに雰囲気が変わるのが切り絵の面白いところ。紙色でもガラリと印象が変化するから飽きません」

トダユカさんのご主人は今年から御崎公園のそばで「豆醒珈琲」という店を開いた。その準備を進めるなかで、手つかずのままだった自宅の隣の物件で何かできないか、と考えるようになったという。

「私が25歳くらいのとき、服飾関係の友人と西区にあった空き物件を改装してアトリエとして使っていた時期があります。お互い結婚するタイミングでその場所を離れましたが、とてもいい経験でした。

ものづくりってとっても楽しいし、その楽しさを皆で共有できる場所になればなあ、と思っています。切り絵にかぎらず、私はものづくり自体が好きだから、こどもから大人まで、作品づくりや展示する場になっていくと嬉しいです」

『ごきげんに』という絵本には「優しさも 怒りも ユーモアに包みたいです」という一節がある。切り絵の作品世界を表したような言葉だ。トダユカさんの人柄に似た、朗らかな場所が御崎公園に生まれる。

## PROFILE

1979年生まれ。明石市出身。神戸市の印刷・デザイン会社に勤務後、2004年より切り絵を中心とした制作活動をスタート。近年の主な実績に「岬の焙煎所」ロゴ作成(2015年)、「こどもおしごと体験」チラシ制作・ワークショップ(2018年)、「豆醒珈琲」ロゴ作成、「神戸市営地下鉄海岸線20周年記念」ロゴマーク作成(2021年)など。

# WADAMISAKI sta.

和田岬駅を出て歩いていると、作業服を着た人たちとよくすれ違った。潜水艦をつくる造船所もあるこの工場町で、靴職人の内尾暢志さんが仲間と共同で運営する工房を訪ねた。

## UCHIO NOBUYUKI

靴職人  
内尾暢志

「和田岬にやってきて17年が経ちました。物置として使われていた物件を友人に紹介してもらったことがきっかけです。僕が育った東大阪市郊外の雰囲気似ていて、家と家の間に工場がある。暮らしとものづくりの距離が近くて、つくり手に対して寛容な町ですね」

内尾さんは、靴職人としては異色の経歴を持つ。設計事務所に2年勤めた後、自分一人で責任が持てる仕事を探していたところ、高校時代に靴が好きで収集していたことを思い出した。

オーダーメイドで、日常に寄り添う靴を

「50足くらい持っていたから、まわりからは“靴屋”と呼ばれていて。靴職人になろうと決めてからは美術学校に通い、神戸ものづくり職人大学で婦人靴のつくり方を学びました。紳士靴もつくりたくて、国内外の職人を訪ねてまわったりもしましたね。スイスで出会った職人は、足や指のない人のための靴をつくっていて衝撃を受けました。平均的な足のために大量生産される靴とはまったく違う、一人ひとりの足の悩みに応えた靴だったんです」  
扁平足や外反母趾といった悩みに寄り添い、デザイン性と履き心地を兼ね備えた靴を目指し、下積みなしで独立した内尾さん。オーダーメイドではあるが、日常的に履いてもらえるように、素材や手法を使い分けて価格を抑えているところも魅力的だ。製作は一人の作業だけれど、工房のシェア然り、職人のつながりを大切にしているように感じる。

「神戸を拠点に活動する『MAIKING THINGS』という靴職人団体の副代表を務めていて、他府県で展示会を行うと“靴の土地柄”が見えてきます。たとえば、金沢は雪の多い地域だから防水性が第一。神戸は縫い目が細かいほうがいいという美意識がある。工房の仲間ともそういった情報を交換したり、革という素材に求める機能や視点を伝えあったりして、刺激を受けています。ライバルだけど同じ志を持つ僕らが、各々の個性を伸ばすことで神戸のものづくり業界が盛り上がり、ユニークな遊具でいっぱい遊園地みたいなになればいいですね」

内尾さんに別れを告げて駅へと戻る道すがら、また作業服を着た人たちとすれ違った。今度は服ではなく、彼らの足にぴったりと寄り添う靴を眺めた。神戸でつくられた靴でかかとを鳴らせば、この街はどんな音を聴かせてくれるだろうか。

### PROFILE

設計事務所勤務後、靴づくりを志す。神戸ものづくり職人大学の2期生。在学中から和田岬に友人たちと共同の工房「KNOCKS: BESPOKE(ノックスビスポーク)」をオープン。昼過ぎまで靴づくりをし、それ以降は元町の「ミサキシューズ」で採寸と販売を行う。第4期神戸ものづくり職人大学での神戸靴科講師、NHK震災関連ドラマ「二十歳と一匹」の靴の制作、2016年度NHK朝の連続テレビドラマ小説「べっぴんさん」の靴の制作協力、ワークショップの開催など多方面で活躍。



## CHUOICHBAMA sta.

地下鉄海岸線に乗って街と人を巡る旅も、いよいよ終着地点へ。待ち合わせ場所である兵庫区材木町の砂浜に行くと、作業中だった漁師の糸谷謙一さんが運河のなかから大きく手を振ってくれた。

## 都会の漁師が背負う使命

「兵庫運河と和田岬沿岸部を拠点に活動していて、兵庫漁業共同組合に所属しています。日本で初めてできた漁業組合で、主に船曳き漁という漁法でシラスやイカナゴを水揚げしています。大阪湾のなかでも和田岬周辺は、六甲山脈から流れてくるミネラル豊富な水と、明石海峡から流れてくる潮がぶつかって海中が活性化するから稚魚が良質なんです」

しかし、昨今は漁獲量が減少の一途。その要因の1つが大阪湾の護岸工事だ。天然の岩礁や干潟がなくなり、食物連鎖のバランスが崩れてしまった。そこで糸谷さんは生態系を改善するための活動として、材木町に人工の砂浜で海藻や魚介が生息できるか実験する場をつくることを提案した。

「いま漁師がもっとも考えていくべきことは、環境問題とどう向き合っていくか。環境保全や生態について学ぶ『水産研究会』を組合内に立ち上げて、2015年から神戸市立浜山小学校で環境学習の授業をしています。4月にアサリの赤ちゃんを砂浜に置いて、11月に取り出したときにどんな変化があるか観察するというもの。神戸には漁師がいて、地元の海で育った魚介類を食べられる環境だということを知ってほしいんです」

大阪湾では、水産資源の保護・育成のために漁業制限が設けられている。漁に出る時間も捕獲する稚魚の量も減って、空いた時間を海の保全・再生活動に当てるようになった。シラスのブランディングにも取り組み、少ない漁でも漁師の経済が成り立つような仕組みづくりにも積極的だ。

漁師

糸谷謙一

KENICHI ITOTANI

「裏六甲と呼ばれる農村エリアの田畑を伝って、栄養豊富な水が山から海へと流れてくるんです。大地はつながっているから、お米をつくって食べることも海を守る方法の1つなんですよ。私たちが生かす豊かな海の恩恵に感謝して、漁師も広く知識を身につけて海を保全していかなければいけません。漁業権には漁を営む権利だけでなく、地元の海を管理する義務も含まれています。山や街にも思いを巡らせながら、目の前の海を守ることは漁師に与えられた使命なんです」

話し終えて辺りに目をやると、そこには街を見守るようにたたずむ運河があった。ゆるやかに街と人はつながっていく。大らかに流れる兵庫運河のように。

### PROFILE

1981年生まれ。2000年ごろから漁師。兵庫漁業共同組合の理事。組合内に若手をつくった水産研究会の会長を務める。昨今では、環境改善を目的に兵庫運河でのアサリやワカメの養殖実験など、海の環境を守るための活動を展開している。





